



ケアの現場での倫理的葛藤を 解決する道標として

[評者] 相澤智子 日本訪問看護振興財団認定看護師教育課程
訪問看護学科専任教員

ケースで学ぶ医療福祉の倫理

菊井和子, 大林雅之, 山口三重子, 斎藤信也編

定価 2310 円(本体 2200 円+税 5%) 医学書院 03-3817-5657

ケースで学ぶ 医療福祉の倫理

[編集]
菊井和子 大林雅之 山口三重子 斎藤信也



医学書院

●誰もが直面したことのある葛藤

「倫理」という言葉を耳にした時、どのようなイメージをもつだろうか。「あまり馴染みのない難解な学問」という印象をもたれがちだが、昨今、個人情報保護法や看護研究の倫理的配慮などにみられるように、「倫理」という言葉は以前よりも私たちに触れる機会が多くなっている。

本書は本誌に連載されていた「事例で考える医療福祉倫理」をもとに企画編集された一冊である。人の生死にかかわる医療職や福祉職と「倫理」は、決して切り離せない密接な関わりがある。タイトルにある「医療福祉」は、医療ニーズに応えることと生活面でのケアが同時に求められることを表わしており、まさに在宅ケアの現場のことであろう。

全3部構成からなっており、第1部の「手引き編」では、まず医療福祉の倫理についての解説が述べられている。その中で、「果たして本当にそれで良かったのかという葛藤が続くのが、医療福祉の現場の特徴の1つであろう」という一文がある。これは、在宅ケアに関わっている援助者であれば、誰もが一度は直面したことのある葛藤ではないだろうか。

そのような時、ただやみくもに悩

み続けるのではなく、専門職の援助者として問題を解決するためには、どのように取り組めばよいのか。ここでは、「問題解決のプロセス」として対処方法を具体的に解説しており、それは、在宅ケアの現場での倫理問題に対する取り組みの大きな指標となるだろう。

●臨場感ある「事例編」

第2部は「事例編」として14のケースを挙げ、第1部での問題解決プロセスを実際に用いて解説している。自宅で最期を迎えることを希望した患者と介護に不安をもつ家族を取り上げた「在宅終末期医療」、認知症の独居高齢者に対する在宅支援をめぐる問題に関する「認知症の独居高齢者」、虐待をされながらもそれを認めず支援を受け入れない高齢者を取り上げた「介護放棄」。在宅ケアの現場で常に大きな問題として取り上げられる事例が次々と登場し、在宅ケアの援助者には臨場感をもって読み進めることができるだろう。

各事例において、当事者および援助者それぞれの対立点を明確にした上で各々の立場が分析されている。かつ、根拠をもった解決試案が明確にされており、客観的な視点をもつ

て解決にあたることの必要性を考えさせられるのである。

また、各事例にかかわりの深い言葉・用語に関しては「TOPICS」として詳細な解説がなされており、倫理問題を考える上で必要な知識をより深く学ぶことができる配慮がなされている。

第3部には、保健・医療・福祉専門職の団体による倫理綱領が資料編として掲載されている。専門職として自らはどのような倫理観をもたねばならないか、常に振り返るページとなるであろう。そして連携する他職種の倫理綱領も知ることができる。

在宅ケアは、ケアが提供される各家庭という場に、主に援助者が一人で赴くことが多い。そのため、援助者はとかく一人で悩み、一人で問題を解決しようとしてしまうことも少なくない。特に、倫理的な問題が生じた場合、その当事者でなければわからない心情の機微などが絡むことは多い。そのようにわかりにくく複雑な問題を、専門職として客観的に問題解決するための道標となる一冊である。